

動物の命の重み：狩猟者の立場から

著者	本郷 亮
雑誌名	エコノフォーラム
号	27
ページ	71-71
発行年	2021-03
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029402

2020年
12月15日
火曜日

本郷 亮 教授（経済学史）

動物の命の重み.. 狩猟者の立場から

私はハンターだ。冬の猟期にはカモ撃ちなどの私的な「趣味」としての猟もやるが、春・秋は、環境省・認定鳥獣捕獲等事業の従事者として三田市の「農政」に協力している。地域の農業を応援したいからだ。狩猟を始めた理由は3つある。

第1は地の利。私は青森に8年間住んでいた。青森・秋田はかつてのマガギの本拠地。マガギとは、今では消滅したが、独自の文化・習俗をもった戦前の東北の鉄砲猟師のこと、ハンターの中のハンターと言つてよい。冒険的でカッコイイので小説等の題材にもよくなり、2004年の直木賞作品、熊谷達也『邂逅の森』は傑作だ。自然と共に生きる彼らのことを知りたければ、甲斐崎圭『第14世マガギ…松橋時幸一代記』（ヤマケイ文庫、2014）もお薦めだ。

第2に、20世紀後半の動物保護の結果、獣が増えすぎたこと。例えば、高槻成紀『シカ問題を考える…バランスを崩した自然の行方』（ヤマケイ新書、2015）、田口洋美『クマ問題を考える…野生動物生息域拡大のリテラシー』（ヤマケイ新書、2017）。2014年には従来の

鳥獣保護法が改正され、鳥獣保護管理法に変わり、（頭数）管理が重視されるようになった。三田市では今季、シカを1頭駆除すれば7千円の補助金が出る（額は年度や自治体により異なる）。また兵庫県では2016年、クマ猟も解禁された。

第3に、県内のハンターがこの30年間でほぼ半減し、高齢化も著しいこと。猟圧が弱まれば、獣は人里に出てくる。県はいわゆる「狩猟マイスター・スクール」（2年間コース）を無料実施するなどハンター養成に

努めており、実は私はその第4期生として一通りの訓練を受けた。

さて、猟の方法だが、グループによる銃猟（山を囲むので「巻き狩り」という）に話を絞るならば、まず山の周りの主な獣道を見つけ出し、それらに射手（「待ち」という）を配置する。そのうえで、犬を連れた「勢子」が山に登って獣を追い立てる。そして獣道を駆け下りてきた獣を「待ち」が仕止める、という流れだ。その後もけっこう大変だ。大人の男の体重ほどもある獲物にロープをかけて山から引きずり出さねばならない。そして最後はナイフによる解体作業と肉等の分配。

ハンターはよく「残酷だ」と批判されるが、私は弁明したい。肉食者が「動物を殺すな」などと言うのは偽善だ。その人は確かに動物を殺さず、それゆえ自分自身の手を汚して

いないかもしれないが、その口は血まみれだ。テイラノサウルスが「動物を殺すな」と言うようなものだ。

例えば、どれも日経新聞の記事だが、「64万羽の殺処分完了、岡山県、鳥インフル対応」（2020/12/16）、「千葉で鳥インフル確認、東日本で初、116万羽処分開始」（12/24）、「千葉で鳥インフル2例目、114万羽殺処分へ」（2021/1/12）、「富山の養鶏場で鳥インフル、14万1千羽の殺処分」（1/24）。経済動物の命は「命」と思われていないのではあるまいか？「生きる」ことは、結局、他の生き物の命を奪うことだ。私はそれを自覚し、その命を可能な限り有効利用したい、それが人間の責任だ、と考える。「自分」が奪う1つ1つの命を無下にしないように改めて自戒したい。消費者の皆さんはどう考える？ ■